琉游舎

アトリエ琉游舎だより 164号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2023年10月25日発行

時秋にして積雨霽、新涼郊墟に入る。灯火ようやく親しむべく、簡編巻舒すべし

●中国の文人、韓愈の詩の一節です。「時、秋にして積雨霽（はれ）新涼郊墟に入る。灯火稍（ようやく）親しむべく、簡編（書物）を巻舒（巻いたり広げたり）すべし」秋になって雨も上がり、晴れて涼しい風が郊外の家にも吹いてきた。『灯火ようやく親しむべし』書物を開くにはもってこいだと詠っています。読書の秋です。「灯火親しむ」は秋の季語。「灯火親しむべし」も、今日では「読書の秋」を表す決まり文句です。出典はこの韓愈の詩です。

●手紙がメールに取って代わられていったように、書籍も電子書籍に取って代わられようとしています。私自身は殆ど本屋さんに出かけることがなく、必要な本はアマゾンで取り寄せているのですが、未だに電子書籍で本を読む気にはなれません。しかしそうなると書棚は本で溢れてしまいます。先日やむを得ず文庫本などを大量に処分しました。

●伝達メディアはインターネットの発明以降急速に変化をしてきて紙媒体は絶滅の危機、全て電子媒体に置き換わってきています。全ての情報も決済もスマホひとつで済んでしまうので、書籍やCDやビデオもアルバムも全て不要、保管場所や整理に気を回す必要もありません。

●その反面、本をめくる手触りや、書店やレコード店で表紙やジャケットを見ながら未知のものを選ぶワクワク感が置き去りにされたように感じるのはアナログ世代の感傷でしょうか。

●電車や打ち合わせの待ち時間にちょっと立ち寄り時間つぶしするにはもってこいの本屋さんはどんどん閉店です。駅前の書店も4年前に閉店。ふらっと立ち寄ることができた所が、わざわざ出かけなくてはならないなら、時間つぶしにはなりません。時間つぶしの時間も貴重な時の使い方だと思うのですがいかがでしょう。本も書棚に並べる分だけスペースの無駄かも知れませんが、本がそこにある、いざという時に書棚を探せば何か求めているものが見つかる、という安心感があるはずです。無駄と思われるものにも無駄の効用があるに違いありません。

10月・11月スケジュール

月	火	水				
			26 映画会 13時半から	27	28	29
30	31	11月1日	2 映画会 お休み	3	4	5 写経会 13時半から
6	7	8	9 映画会 13時半から	10	11	12
13	14 読書会 13時半から	15	16 映画会 お休み	17	18	19
20	21	22	23 映画会 お休み	24	25	26

読書会
11月14日
（火）13時半

写経会
11月5日
（日）13時半

映画会
10月26日
11月9日（木）

狂言綺語…無心

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

秋の夜長を楽しむ気候になってきました。かといって灯火の下で本を開くような生活にはほど遠く、夕食後はお酒を呑みながらネットサーフィンやTVザッピングをしているうちに就寝の時間となり、いつの間にか翌日の朝になっているという毎日が近年の私の夜長の過ごし方になっているようです。テレビやスマホが日常の時間を支配するようになってからは、私たちは読書よりも楽しい娯楽があることに気づいたのか。そもそも読書を娯楽と単純に言ってしまってよいものかもありますが、読書が特殊な時間のように思われ活字離れが進むことが心配です。読書が知識欲をみたすものであれ、娯楽のためであれ、あるいはたとえ時間つぶしのためでも、本を読むという時間が当人にとって楽しい時間であればそれでよいのではないでしょうか。

私たちの本との出会いはまずはお母さんの読み聞かせから始まるのでしょう。琉游舎にあるミニ図書館では、幼児が自分に合った本を見つけてはお母さんの所にもっていき、読むようにせがむ光景を何度も見ています。２歳の子も４歳の子も自分に合った本を的確に見つけて持ってきます。この年頃の子どもの読書は言葉を読むものではなく、親の声を通して耳で聞く読書です。聞く子供と語る母の声と作者の絵と言葉が三位一体となった幸せな時間です。もう少し成長して6歳くらいになると自分で読みはじめるようです。最初はお母さんと一緒になって音読です。つっかえながらも文字を音にしていき、その自分の声が奏でた文字の音を自分の耳に再生しているかのようです。文字が眼と耳を通して複合的に読者の身体の中に吸収されていくのでしょう。活字を眼で追い、声で音に替え、耳でその音を自ら聴くという、読み手と聞き手と作者の三者の関係性の読書から、成長とともに作者と読者との一対一の個人的な読書へと、読書の原初体験が変わっていくようです。本を語り聴聞する読書から眼と脳が吸収する読書へ、すると音読は黙読となっていきます。

最近の小学校ではどのような方式か知りませんが、私の頃はまず国語の授業は音読から始まりました。先生や当番の子の音読の先導に始まり、皆が跡を追って教科書を唱和するなどして文字を音にし、各々の耳に届くことでそこにいる人たち全てがその文字の音を共有する読書体験です。そこから読む楽しさ、聞く喜び、それを共有する経験を自然と身につけていたといえば大仰に聞こえるでしょうか。言葉を目で読んで脳を経由して理解するよりも先に、音によって体の中に自然に入っていく言葉の共有体験が、今でも私が本を読む時間を楽しいと感じるもとになっているような気がしてなりません。たとえそれが音読の機会が極端に減った現在の私の読書だとしても、本そのものとの一対一の読書を、言葉を介しての作者や登場人物、本が示す世界との対話だと考えることができるのは、年少の頃の音読体験で知った読む喜びがあるからでしょう。

毎朝の朝勤で行われる読経も音読の場です。と言えば意外に聞こえるかも知れません。法要などの場を除いて私が読経するところでは、聴衆は誰もいないようにみえ、声を出しているのも私一人だけのようにしかみえません。誰に対して何のために読経しているのでしょう。日蓮宗の読経では木鉦を叩きリズムをとり読経を先導します。修行時に身延山の朝勤で100人ほどの僧侶が一緒に読経した時も、琉游舎で私一人が読経するときも同じように木鉦を叩きます。実は読経の場には生きとし生けるものが参集して木鉦でタクトを振るう音に合わせて経文を唱和しているのです。経文はお釈迦様の言葉です。その言葉を聞き逃すまいと読経の声に導かれ衆生（生きとし生けるもの）が集まります。法華経にはお釈迦様の説教の場に四部（比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷）の弟子たちと八部衆（天。龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦楼羅。緊那羅。摩睺 羅伽）の仏法を守護する眷属。そして人と非人等が集まっていることが随所に記されています。神力品第21には「受持読誦。解説書写。如説修行（中略）当知是処。即是道場。諸仏於此。得阿耨多羅三藐三菩提。諸仏於此。転於法輪。」（法華経を読誦するところはそこがどこであれ道場となる、そこでは悟りを得ることができ、仏の教えが説かれる）と記されています。経文の読誦（音読）は四部八部衆を含めた衆生が集まって唱和し仏の教えを讃嘆し今日もまたありのままに仏の道をあゆむことを自分自身に願い誓い行う場です。たとえ一人で朝勤の読経を行っているように見えようとも、そこはありとあらゆる存在が無心に経を唱和することで「教えと一体となる（仏になる）」ことを信じる衆生の無限の喜びが調和し、共有される「場」です。

「無心の音読」この言葉は読書会でご一緒している首藤先生注１がフェイスブックに投稿されていた言葉です。今回の狂言綺語はこれに触発されて書きました。主題に続いて記されている言葉は「無心の音読　音読に技巧は不要。ただただ、無心に声に出す。そこに、無限の味わいがある。欲を減らして、声に出してみる。声に出して文字をたどる。ただそれだけでいい。」この言葉はそのまま私の読経の時の言葉「無心の読経」です。無心になった時そこには何もありません。「空」です。そこにありのままの私と縁起の因縁が立ち現れてきます。その時初めて仏との対話が可能になります。対話は私の無心の中に仏が現われ同体となることです。そして同体であることの喜びを仏と分かち合うことです。私の読経の声と仏の言葉が同調し合いハーモニーを奏でる時を求めて、私は無心の読経を願い誓い行う毎日を続けているのでしょう。

人は「有心」の生き物です。「無心」であり続けることが不可能な生き物。しかし大いなるもの（ありのまま）に触れるには無心でなければなりません。人はまた罪悪深重煩悩熾盛の生き物の自覚があるからこそ無心であることを願うのです。無心であることで観るもの、それが読書でも芸術でもスポーツでも読経でも、無心であった瞬間に出会ったそれらと同体となる瞬間を至上の喜びと感じることが出来れば、それは大いなるものとの出会いです。私には仏との出会いとなるのでしょう。

注１：国語教育研究者首藤久義氏（無断転載をお許しください）

琉游舎：戸井　出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp